

34. 黒田庄と松明調進

奈良時代、地震や反乱、疫病の流行などが次々に起こり、聖武天皇は仏教の力によって国を
しずめようと、奈良に大仏を建立しました。

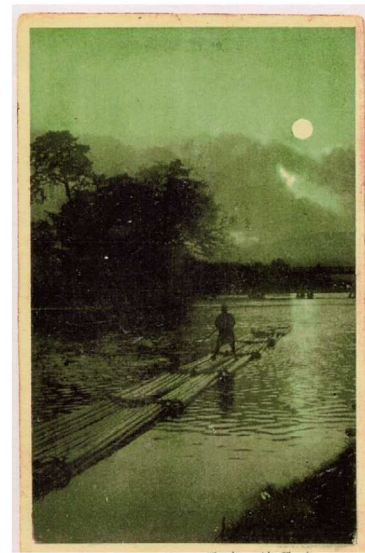
当初の大仏は、屋外にあり、約6年の歳月を費やし758(天平宝字2)年に大仏殿が完成し
ました。名張はその建立に重要な役割を果たしました。



矢川から黒田方面を望む

1. 東大寺領伊賀国黒田庄

世界最大の木造建築物東大寺を建てるためには、たくさんの材木が必要でした。聖武天皇の
意思をついだ孝謙天皇は材木の供給地として、板蠅杣を東大寺に献上しました。杣とは山林の
ことで、板蠅杣は、名張の西、テレビ塔のある茶臼山麓から奈良県山添村にかけての広大な
山林です。



有明の月の名張川を下る筏

ここで伐採された材木は、名張川で筏に組まれ、木津川を下り、平城京へと運ばれました。短野の山上には、浮池と呼ばれる大きな池があります。伐採した木はこの池にも貯められ、堤防をくずして、水の勢いを使ってふもとの名張川まで流していました。

三世一身の法や墾田永年私財法などが発布されると、東大寺は、現在の錦生・蔵持地域の開発にも乗り出し、やがて荘園とします。これが黒田庄と呼ばれる荘園です。そして、名張の土地をさまざまな寺社や藤原氏などの貴族が、次々に開発を進め荘園としていきます。やがて、名張のおよそ3分の2の田を東大寺が荘園とし、残りの3分の1が伊勢神宮の荘園となりまし

た。東大寺は全国にたくさんの荘園も持っていましたが、黒田庄は他の荘園に比べて、圧倒的にたくさんの当時の記録が残されているので、荘園のことを知る上でも重要な荘園とされています。

武士が登場し鎌倉時代になると、荘園の役人として東大寺に仕えていた人たちが武装をし土豪となります。そして経済力と武力により荘園領主である東大寺の命令を聞かなくなります。東大寺は「自分たちの言うことを聞かない悪い仲間」ということで「悪党」と呼び、鎌倉幕府へ捕まえるよう訴えていきます。しかし、地元の人たちは、都で優雅な暮らしをするために年貢を取り立てて持って行く荘園領主に治めてもらうより、独立して自分たちで村を治める方が良いと考えたのでしょう。徐々に黒田庄での東大寺の影響力は弱くなり、やがて戦国時代をむかえると東大寺領黒田庄は消滅します。その後、悪党と呼ばれた土豪衆たちは、「伊賀惣国一揆」と呼ばれる連合体(一揆)を作り、織田信長の伊賀攻め「天正伊賀の乱」まで繁栄を築いていきます。



黒田の悪党であった大江氏が建てた杉谷神社

2. 東大寺二月堂お水取りと伊賀一ノ井松明調進行事

東大寺二月堂の「お水取り」は、関西に春を告げる行事として広く知られています。正式には「修二会」という行事で大仏開眼の752(天平勝宝4)年から一度も途絶えることなく続けられています。「お水取り」とは、3月12日の深夜、練行衆と呼ばれる僧侶が、観音様にお供えする「お香水」を「若狭井」という井戸から汲む行法です。江戸時代、松尾芭蕉がその様子を見て『野ざらし紀行』の中で「水とりや氷の僧の沓の音」という俳句を詠み、その名を広めました。

黒田庄に「聖玄」という東大寺の僧侶がいました。聖玄は、1249(宝治3)年にお水取りの松明費用に名張の自分の土地、田6反を寄進しました。これが記録にある「伊賀一ノ井松明調進行事」の始まりとされています。また、赤目町一ノ井には「道観長者」の伝説が残されています。道観長者は、この辺り一帯を治め栄華を極めていましたが、ある時、家族に次々と不幸がおとずれて没落していきます。長者はやがて自らの行いを悔いて改心し、二月堂の観音様の力にすがり、遺言として毎年、松明の木を一ノ井から送るようになったと伝えられ、記録より少し前の頃とされています。



二月堂



修二会

杉谷神社 【→P67】
天正伊賀の乱 【→P56】

一ノ井には、この伝統行事を代々守り継いでいる「伊賀一ノ井松明講」という組織があります。

毎年2月11日に朝早く極楽寺近くの松明山と呼ばれる山に入り、樹齢100年位の真直ぐに伸びた檜を1本切り、短くして山からみんなで担いで極楽寺まで運びます。そして境内で木の皮をむき、より薄く割ります。幅3寸(約9cm)、長さ1尺2寸(約36cm)、厚さ9mm程のカギ状の板にし、1200枚以上の松明を作ります。一ノ井の松明は煙の少ない檜が使われています。



極楽寺での調整



道観塚の碑

3月10日、道観塚の碑の前で今年の松明木が完成したことを道観長者に報告し、12日の調進が二月堂に無事に納められるようみんなでお祈りをします。

3月12日、まだ太陽が昇る前の早朝に極楽寺に集まり、6時に奈良に向けて松明を担いで出発します。テレビ塔のある茶臼山の西にある笠間峠までは、実際に昔の山道を約10km歩いて行きます。奈良県の上笠間に着くと、地元の人たちが一行を「しし汁」でもてなしてくれます。



笠間峠

今はそこからバスで奈良まで行きます。東大寺では手伝いや寄付をしている人たちとともに特別なもてなしを受けます。そして二月堂で行われる夜の行法を見学し、翌朝、一ノ井へ戻ります。

運ばれた松明木は東大寺の蔵で1年間乾燥させ、翌年の「達陀」行法などで使われます。「達陀」は、修二会のクライマックスと呼ばれ、3月12・13・14日の最後の3日間深夜に二月堂の中で行われます。その時に使われる「達陀松明」(長さ約3m、重さ40kg)に火を付け、炎の燃え盛る松明を練行衆が、堂内の観音様の周りを火のついたまま引きずり回し、最後に床に叩き付けます。これは、人々の煩惱や穢れを全て焼き尽くし、二月堂内を清めるという神聖な儀式です。この松明の芯木として一ノ井の木が使われています。



一ノ井の松明が使われる達陀松明



達陀

このような伝統行事を守り継いでいる一ノ井松明講ですが、高齢化が進み、山からの切り出しなどの大変な作業が困難になってきました。そこで今では、地元赤目地区の青年会、名張青年会議所や市民グループの「春を呼ぶ会」、市内の高校生や高等専門学校生たちも加わって、この伝統行事を支えています。そして、その取り組みが、伝統行事を支えていく未来の担い手育成事業として、2011(平成23)年、日本ユネスコ協会連盟の「プロジェクト未来遺産」に三重県で初めて登録されました。



松明木を運ぶ高校生

唐招提寺への竹送り

東大寺以外に唐招提寺でも伝統行事に名張から送られた女竹が使われています。

奈良時代、鑑真和上が唐から日本へ招かれました。度重なる苦難を乗り越え来日した鑑真和上は、東大寺大仏殿で400人に戒律を授け、正式な僧侶としました。鑑真和上は、はじめ東大寺に住んでいましたが、後に夏見廃寺を建てた大来皇女の弟である新田部親王の屋敷があった場所に唐招提寺を建てて晩年を暮らしました。近年の発掘調査で、唐招提寺から夏見廃寺と同じ型で造られたせん仏が出土しています。

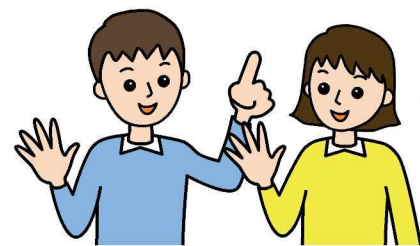


竹送り

この唐招提寺に鎌倉時代、覚盛上人と呼ばれる方がおり、生前、殺生はいけないと蚊も殺さなかったことから、その徳を偲んでせめてうちわで蚊を払えるようにとハート型のうちわが、毎年5月19日に唐招提寺の境内でまかれます。このうちわの軸となる竹は、2011(平成23)年より毎年1月19日に名張から送られています。



ハート型のうちわ



今まで続く名張の伝統行事について調べてみよう。